

市民提案・市民主体の身近なまちづくり

検討メンバー 建築局中部建築事務所建築審査課 肥山達也 金沢八景駅東口開発事務所 酒井 純 都市計画局都市デザイン室 落合健太郎
 下水道局南部下水処理場 高塚 篤 建築局住宅政策課 中澤正紀

平成15年度アントレプレナーシップ事業「市民提案・市民主体の身近なまちづくり」について、現在まで検討してきた概略を紹介し、検討状況を振り返ってみたいと思います。

① 検討メンバー

右記のとおり建築局と都市計画局所属のメンバーがほとんどです。

検討テーマを考えると、道路局や緑政局の技術職の方や、区役所でソフト面でのまちづくりにかかわった方の応募も期待していたのですが、結局応募していただけず残念でした。テーマが漠然としたものだったからではないかと思っています。

しかし、機械職で新人の高塚さんが参加してくれたことがよかったです。しかし、機械職で新人の高塚さんが参加してくれたことがよかったです。しかし、機械職で新人の高塚さんが参加してくれたことがよかったです。

② 「市民提案・市民主体の身近なまちづくり」事業の概要

端的に言うと、今まで十分に対応できていなかった市民の身の回りを

中心とした身近なまちづくりについて、変化し多様化する市民ニーズに応えるために、地域のハード整備事業を市民主体で進め、それを専門家と市が連携・協力し適切に支援するというものです。

現在、ハード整備に関しては、市民、行政双方ともに「行政が行うもの、行政にやってもらうもの」という意識が前提となっています。しかし、地域レベルのハード整備となると、現実には施策、財政投資上のプライオリティーが低く、公平性などを重視するという行政側の事情があるため、市民の要望はなかなか実現しません。こうした状況が市民の無関心を助長し、市民の行政に対する不信感を強める結果を招いてきたと考えられます。

そこで、こうした状況に対応する方法として、今回、やる気のある市民がまちづくり等の専門家や市から支援を受けて、地域のハード整備事業の企画から合意形成、施工、維持管理まで自ら行うことができる仕組みをつくったものです。(図1) 知恵がある人は知恵を出し、お金がある人はお金を出し、時間がある人は時間を出すと、市民自治の原型

がこの事業の基本です。こうした取り組みを進めることで、地域への愛着が出てきて、地域コミュニティが活性化することが期待できます。事業の選考はコンテスト形式としました。コンテストも市民主体で行い、NHKの「難問解決!ご近所の底力」という番組のように、市民(地域)の間での「情報交換」の促進などの役割も持たせました。

③ 検討テーマ応募のきっかけ

「何か変えられないかな」と考えながら仕事をすすめる中で、「狭あい道路をもっと広げられないかな」と思っているいろいろ考えていたことが、アントレプレナーシップ事業の種になりました。そして、新聞でアイランドの街づくりに関する記事(アイランドでは「タイディ・タウン」と呼ばれる街づくりコンテストによ

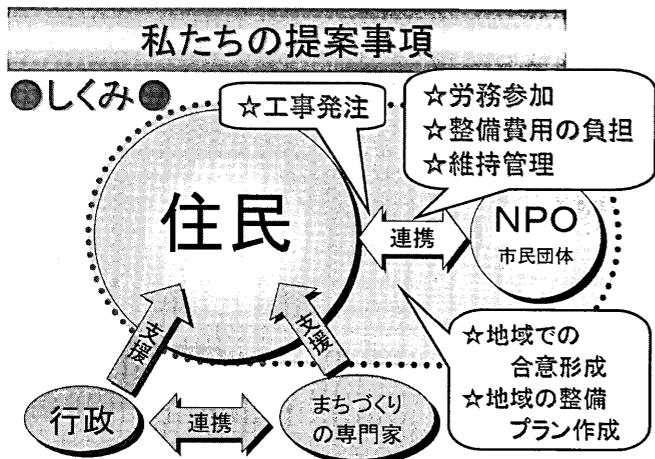
④ 検討プロセスで苦労したこと

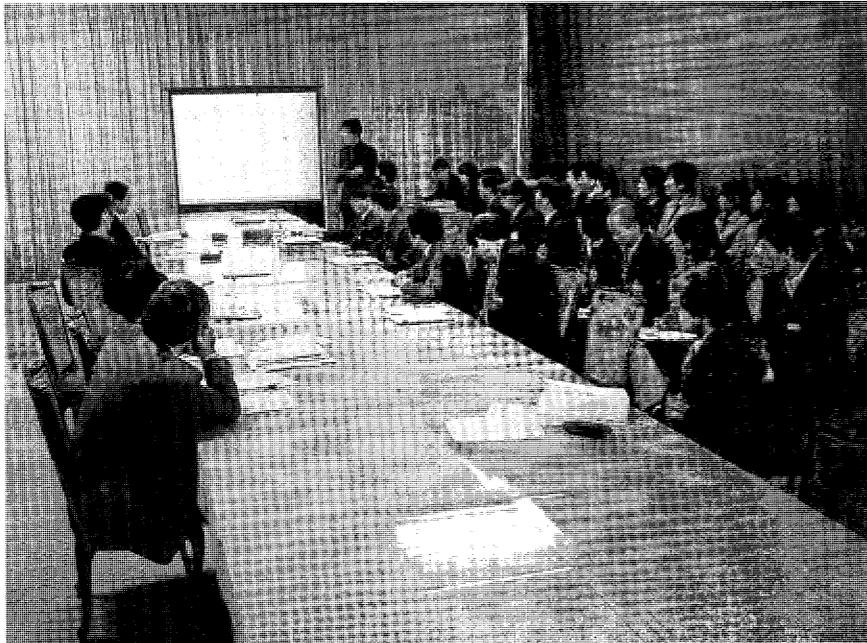
まずは、メンバー全員の意思統一が大変でした。メンバーみんな「まちづくり」に対していろいろな考え方を持っているのですからある程度予想はしていましたが、テーマ応募者として譲れないところもあり、特に検討開始直後は想像以上に時間を費やしました。

それから、アントレプレナーシップ事業の制度がまだまだ浸透していないため、庁内や庁外で情報収集する際に、検討チームの位置づけがなかなか理解してもらえず、チームの想定以下の情報しかもらえなかったこともありました。

私個人の話になりますが、テーマ応募者はチームリーダーとなるのですが、テーマ応募者としての意見を言いたい気持ちと、チームリーダーとしてうまく取りまとめるプレゼンテーションまで進めていかなければいけない気持ちとの間で葛藤がありました。ここで大切なことは、自分の考えの趣旨を、相手に正しいニュ

図-1





プレゼンテーションの風景

アンスでわかりやすく伝えることで、これがうまくできれば効率よく検討を進められますが、私はうまくできないことが多かったように思います。しかし、今回はメンバーに恵まれていたので、検討結果が私の考えと大きく違う方向になることはなく、よかったですと思っています。

⑤ 検討を振り返って

この事業は新たな発想からスタートしたこともあり、事業の需要（必要性）と緊急性について、かなりの説明が要求されました。そのため、市民や企業の寄附も視野に入れたラスト（公益信託）やコンテストにおける審査基準などの検討をもっとできなかったのですが、時間がなくてできませんでした。事業化の審査に必要で、検討しなければならない事

項を早期に整理することができていればよかったと思います。

⑥ アントレプレナーシップ事業に必要なこと

まず、何といつても検討メンバーが所属する職場の方々の理解と協力です。私はチームリーダーという立場上さらに配慮してもらったかもしれませんが、活動日には毎回、職場から快く送り出してもらいました。他のメンバーも、所属職場の方々からの多大なご理解とご協力をいただきましたので、活動日にはメンバーで十分議論することができました。また、活動日以外で急な打ち合わせをしなければならなくなったときや資料を作成しなければならなくなったときなど、所属職場に影響が出たときも、所属職場の方々が助けてくれたことが数多くありました。それから、先にも述べましたが、自分の考えの趣旨を相手に正しいユアンスでわかりやすく伝えることです。新しい事業を様々な経験を持ったメンバーでつくり出すわけですから、ひとつの検討事項に対して様々な意見が出てきます。自分の考えを表現できる具体的な事例を持つようにするといいいのではないかと思います。また、市民満足度の向上という視点です。最近、民間企業の重要課題の一つとして「コンプライアンスの

確立」が挙げられる、という話を聞きます。「コンプライアンス」とは従来、「法令順守」という意味で使われていましたが、本来は「消費者の期待に応えること」という意味だそうなんです。今、本市の「新時代アクションプラン」でも同様の取り組みをしているといえるのではないのでしょうか。この事業も市民満足度の向上が出発点になっています。アントレプレナーシップ事業は新規事業になるわけですから、この視点を柱として検討しなければならないと思います。

そして、費用対効果が十分にあるということ。さらなる税収不足が想定される中、各局区ともに事業を縮小せざるを得ない状況になっています。新規事業としてやるわけですから、投じた予算が回収できるレベルの効果が期待される事業が求められます。

技術的な部分では、プレゼンテーション能力です。今回の検討の中間時に、市長・副市長等報告会がありました。その席上で市長から「プレゼンテーションが下手だ」と指摘されてしまいました。準備の時間があまり確保できなかったとはいえ、チーム内で「大丈夫だろう」という気持ちがあったので、身が引き締まる思いでした。新しい事業の内容を10分弱の時間でプレゼンテーションするわけですから、言葉の使い方

を含め、プレゼンテーションの内容にも十分時間をかけ精査すべきです。

⑦ これからのアントレプレナーシップ事業に期待すること

繰り返しのようになりますが、検討メンバーが所属する職場の方々の多大な理解と協力です。短期集中型の検討になるので、所属職場に後ろ髪引かれる思いのままアントレプレナーシップ事業の検討をしようとしても、それではなかなか進みません。今後、職場からアントレプレナーシップ事業の検討メンバーに選ばれる方が出てくることがあったときには、その職場のみなさんは、ぜひご理解とご協力していただきたいと思っています。

それから、多くの職員が持っている新規事業の種を、どんどん事業化していける仕組みにしていきたいと思っています。市民満足度がアップする新規事業が増えていけば、市政に関心を持った市民も増えて、相乗効果により、お互いの満足度もより高まると思います。

最後に、このアントレプレナーシップ事業という制度を、職員みんなでもっと庁内、庁外に浸透させていく必要があると思います。この制度がきちんと認知され、活発になれば、たとえすべて事業化されなくても、本市にとって大きなプラスになるはず。〈文責＝肥山達也〉